

第3章 帯広市の産業

佐藤 礼顕

3.1. 帯広市の概要

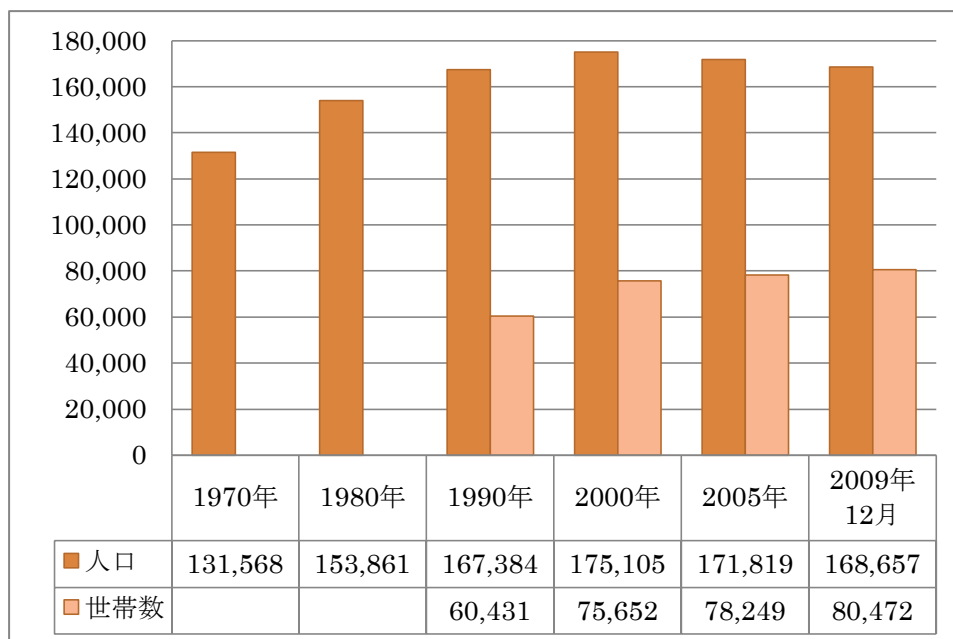
3.1.1 地勢

帯広市は、十勝地方の中央、盆地状の十勝平野のほぼ中心部に位置する、面積 618.94km²の市である。東は幕別町、西は芽室町、南は中札内村および更別村、北は音更町に接している。土地の約 60%は平地であり、他は日高山系の山岳地帯となっている。市街地は概ね平坦で、街路は碁盤目状に延びている。日高地方との境である山岳地帯は、札内川とその支流の戸蔭別川および帯広川の源流域であり、十勝幌尻岳、戸蔭別岳、札内岳の秀峰がそびえている。三方を山に囲まれた十勝平野は、元は砂れき地帯の上に火山灰が厚く堆積した段丘の連なりだったが、長流・十勝川およびその支流により長い年月の間に削られ、現在の大平野が形成された。

3.1.2 人口

帯広市では、1883 年に晩成社が入植して以来、人口の統計が行われており、以来人口・世帯数とも年々増加してきたが、人口については道央圏や周辺自治体への流出により、2000 年を境に減少傾向にある。人口の減少とは対照的に世帯数が増え続けており、核家族化、晩婚・非婚化、離婚率の上昇等、現代社会によく起こる現象が帯広市においても例外ではなく起こっていることが明らかである。2009 年 12 月末日現在、人口は 168,657 人、世帯数は 80,472 世帯となっている。

グラフ 3-1 帯広市における人口と世帯数の推移

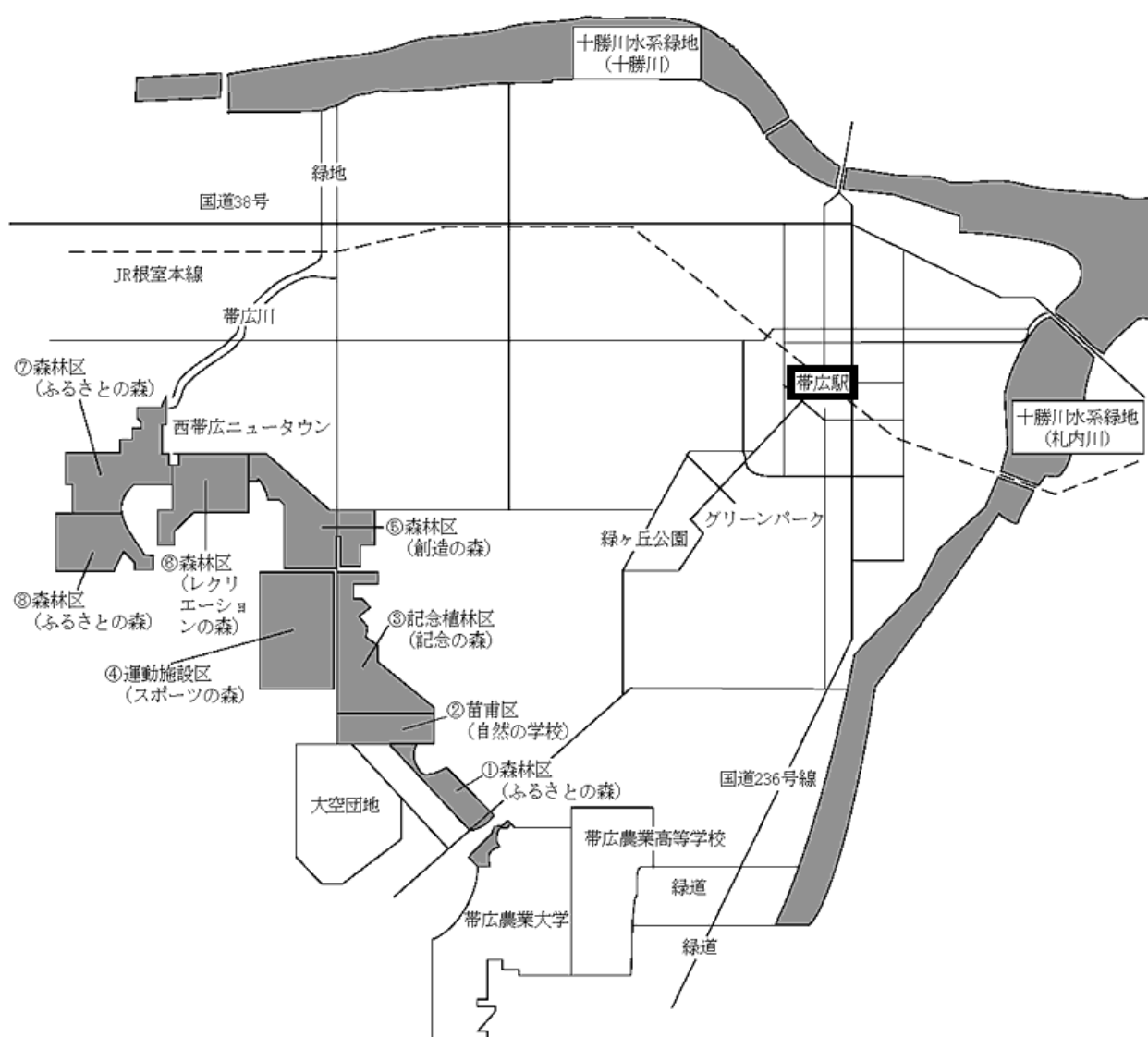


出典：1970 年～2005 年は国勢調査、2009 年のみ住民基本台帳

3.1.3 都市計画

帯広市の都市計画は「20万人都市論」を原点としている。1974年に都市計画決定した大規模公園「帯広の森(計画面積：約407ha)」の造成が物語るように、一貫して市街化区域の無秩序な拡大を抑制してきている。この「帯広の森」構想は、人口の増加が著しかった高度経済成長期に、都市における人口の適正規模を20万人とし、その人口を収容する市街地を自然環境豊かな森林帯で包み込むことで、都市と農村が調和のとれた発展を目指す「近代的田園都市」を都市像として掲げたことから始まっている。この事業はその後30年間以上にわたり、市民が主体となった植樹祭を通じて、20万本以上の樹木が植えられてきている。加えて、十勝川及び札内川の河川緑地約667haのグリーン・ベルトが帯広市街地を包み込んでいる。

図 3-1 「帯広の森」構想図



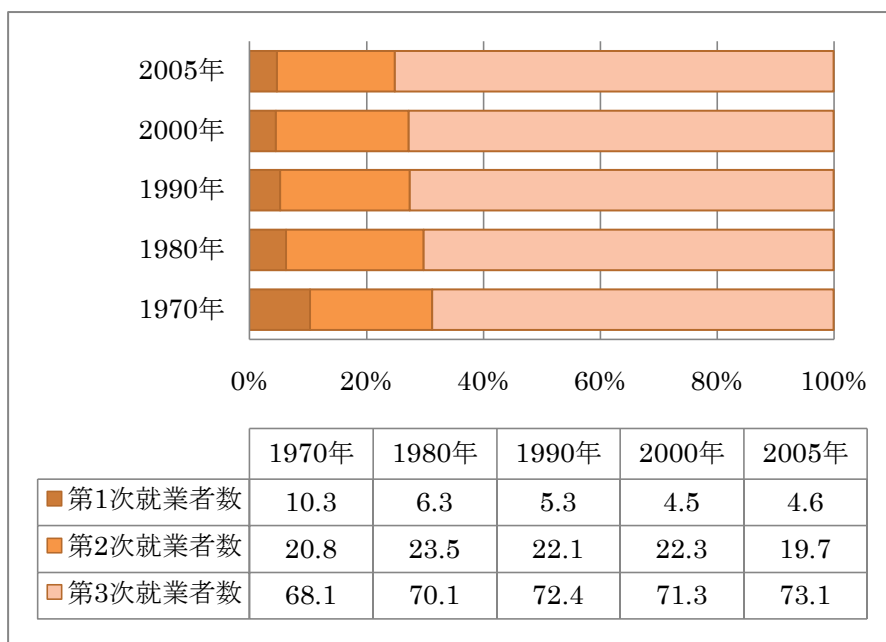
出典：環境省 HP

3.2. 産業

3.2.1 第1次・第2次産業割合の減少

下図は、ここ 35 年間の産業別構成比の推移を表したグラフである。これより、構成比の変化、特に第3次産業の拡大が読み取れる。

グラフ 3-2 帯広市における就業者数の産業別構成比の推移



出典：国勢調査

3.2.2 商業と市街地

平成 14 年商業統計調査(小売業)によると、帯広市の商店数は 1,860 件、従業員数は 14,778 人である。しかし、交通結節点としての JR 帯広駅をはじめ、行政機関、医療機関、地元百貨店、飲食店、娯楽店が立地し、十勝圏の都市的サービスを提供していた中心市街地は、他中小都市と同じ運命をたどり、その衰退が顕著になってきている。これは自動車社会の到来、大規模施設の郊外移転などによるものであろう。このため、帯広市は中心市街地の衰退を「地域経済・生活福祉の危機」として捉え、「中心市街地活性化基本計画」を国に提出、認定され、街づくりに取り組んでいる。

その中で挙げられた基本的方針は、旧基本計画で課題とされたものが盛り込まれたものであり、

「居住環境の整備からコミュニティの再生へ」

「散歩を楽しめる商店街へ」

「文化に接する機会の提供から新たな人の流れへ」

という 3 本柱が建てられ、2007 年 8 月から 2012 年 3 月を計画期間とし、再活性化に取り組んでいる。

表 3-1 帯広市に本社・支社等を置く主な企業（五十音順）

(株)いちまる	スーパーマーケット	帯広市・音更町・清水町・中札内村に 13 店舗を経営。
(株)オカモト	ガソリンスタンド	セルフ式スタンドを北海道・東北地区に 40 店ほど出店。
カルビーポテト(株)	食品加工	1976 年にカルビーから分離。じゃがりこ、ジャガビーを製造。
十勝バス(株)	路線バス	帯広市を中心に十勝地方で路線バス、貸切バスを運行。
日本甜菜製糖(株)	飼料配合	帯広製糖所は 1977 年に廃止、現在は飼料配合の研究を行う。
(株)藤丸	百貨店	帯広市において藤丸百貨店を経営。1900 年創業。
(株)藤森商会	カレー	帯広市・釧路市・芽室町において「インデアンカレー」を経営。
(株)柳月	菓子製造	音更町で和・洋生菓子を製造、道内直営 40 店舗により販売。
六花亭製菓(株)	菓子製造	帯広市に本社を置き、

出典：フリー百科事典 Wikipedia

3.2.3 工業

帯広市の工業は、基幹産業である農業を核とした食料品加工や地場資源を活用した地域に密着した製造業が中心となって発展してきた。平成 19 年度工業統計調査によれば、事業所数 148 件、製造品出荷額が約 1,192 億円である。また近年では、「緑の工場公園」として造成された帯広工業団地・新帯広工業団地に続く中核的工業団地として「帯広市西 20 条北工業団地」(36.8ha)を整備し、とから帯広空港や道東自動車道へのアクセスの良さを売りに、企業の誘致を行っている。

3.2.4 農業

耕地面積が市の面積のおよそ 1/3 を占める帯広市では、平成 18 年現在で 740 戸の農家が、一戸当たり約 30ha の土地で農業を営んでおり、小麦・馬鈴薯・大豆・小豆・甜菜・長いもなどを、大規模で機械化された土地利用型農業を展開している。

3.3. 交通網

3.3.1 道路

・高速道路

帯広広尾自動車道[芽室帯広 IC、帯広川西 IC、幸福 IC]

・一般国道

国道 38 号(滝川市—釧路市)

国道 236 号(帯広市—浦河町)

国道 241 号(弟子屈町—帯広市)

3.3.2 鉄道(旅客)

・JR 根室線[西帯広駅—帯広駅(旅)]

このうち、帯広駅は帯広市の代表駅であり、特急スーパーとから(札幌駅—帯広駅間)、特急スーパーおおぞら(札幌駅—釧路駅間)を含め、全列車が停車する。

※帯広駅には旅客駅と貨物駅が別に存在するため、(旅)と明記した。

- ・かつて運行されていた路線
 - ・国鉄広尾線(帯広駅—広尾駅間)、1987年2月2日全線廃止。
 - ・国鉄士幌線(帯広駅—十勝三股駅間)、1987年3月23日全線廃止。

3.3.3 帯広空港(愛称:とかち帯広空港)

帯広市南東部に位置する第二種(B)空港であり、道内では新千歳空港に次ぐ敷地面積を持つため、道内主要空港の代替空港として利用されることもある。

- ・開設されている路線
 - ・東京国際(羽田)空港
 - ・名古屋飛行場(小牧空港、旧名古屋空港)
- ・かつて開設されていた路線
 - ・大阪国際(伊丹)空港(—1994.07)
 - ・仙台空港(—1997.10)
 - ・福島空港(—2000.09)
 - ・新千歳空港(—2006.11)
 - ・函館空港(—2007.09)
 - ・関西国際空港(—2009.09)

なお、現在では日本航空による運航のみである。

参照 HP

フリー百科事典 Wikipedia HP

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%81%E5%8B%9D%E6%94%AF%E5%BA%81>

十勝支庁 HP

<http://www.tokachi.pref.hokkaido.lg.jp/>

帯広市 HP

<http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/mpsdata/web/1258/011.pdf>

<http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/mpsdata/web/1201/12.P59-72.pdf>

環境省 HP

<http://www.env.go.jp/>